

不妊治療、細心の現場 先進的な神戸の診療所をルポ (1/2ページ)

2009年2月24日



受精卵を育てる培養液を準備する胚培養士＝2日午後4時23分、神戸市中央区、矢木隆晴撮影

香川県立中央病院（高松市）で、不妊治療を受けた20代の女性患者に他人の受精卵を移植したとされる問題では、担当医が1人で作業するなど「ダブルチェック」の態勢が取られていなかったうえ、作業台に2人の受精卵を並べるなどした初歩的ミスが、女性患者の中絶という悲劇につながった。安全管理の水準は医療機関によって差があり、統一的な基準づくりが必要との声も上がる。先進的な取り組みで知られる診療所を訪ねた。

神戸市役所のすぐ近くにある「英（はなぶさ）ウイメンズクリニック」（同市中央区）の待合室は、診察を待つカップルや女性患者であふれていた。「初歩的なレベルのミスと言わざるを得ない」。香川の取り違い問題で患者に不安が広がらないよう、そう書かれたチラシが入り口に置かれていた。

「日本生殖補助医療標準化機関」の認定を受けた全国20施設の一つで、男性を含め年間延べ9万5千人の患者が訪れる。大半が不妊に悩む患者だ。香川県立中央病院とは、どこが違うのか。塩谷雅英院長の案内で最も奥にある培養室に向かった。

培養室には採取された卵子が運び込まれる。光で傷めないよう照明は薄暗い。一つのシャーレの中の卵子は最大3個。精子を入れて受精卵を培養器で育て、状態の良いものを患者に移植する。香川で受精卵の取り違いが起きたとされるのは、この培養作業中だった。

クリニックで働く胚（はい）培養士（技師）は18人おり、この日の出勤は12人。「〇〇様、IDは……」。2人1組になり、声かけで確認しあいながら、培養器から受精卵の入ったシャーレを取り出した。1人が顕微鏡で生育状態を観察。もう1人が台帳に総数や、質ごとの数などを書き込んでいく。香川ではこうした作業を担当医（61）が1人でやっていた。

不妊治療、細心の現場 先進的な神戸の診療所をルポ (2/2ページ)

2009年2月24日



受精卵を育てる培養液を準備する胚培養士＝2
2日午後4時23分、神戸市中央区、矢木隆晴
撮影

作業台に2人以上のシャーレを置くことは厳禁だ。ふたと本体には、受精卵を傷めない特殊なインクのペンで患者名とIDが書かれている。

クリニックでは、停電しても培養器の受精卵を守るため自家発電装置を設置。夜間、培養器に異変があれば、院長や胚培養士の携帯電話に警報が届くシステムも作った。「どれだけ事故防止策を講じてもやりすぎということはない」。胚培養士の橋本洋美さん(30)は言い切る。

待合室に戻った。

患者は院内PHSを渡され、順番が来るとPHSで呼ばれ診察室に入る。看護師が他の患者の前で名前を呼んで、プライバシーを侵害しないためだ。塩谷院長は「友人や家族にさえ相談できない人が多く、少しでもストレスをなくす環境を作るよう努力している」と話す。

年間500件の採卵をしている奈良市のASKAレディースクリニック。胚培養士3人が勤務し、ダブルチェックする。中山雅博院長は「1人で作業している施設も珍しくない。生殖医療については、ほとんど法整備ができていない状態だ。早急に整える必要がある」と話す。(向井大輔)